

保育者養成課程の大学生の応用行動分析の知識の促進

—子どもとの集団活動場面におけるスタッフトレーニングの効果—

渡邊孝継

（星美学園短期大学幼児保育学科）

KEY WORDS: 応用行動分析, 大学生, スタッフトレーニング

（目的）

保育者養成課程の大学生たちは、実習やボランティアの中で保育士に必要な知識や技術を習得しようとする。しかし、その過程で、子どもとの関わり方に頭を悩ませる大学生は多い（片岡, 2020）。土居(2012)は、中でも特別なニーズのある子どもとの関わりが難しいと報告している。

大学生の子どもと関わる力を促進するための方法として、行動を個人とその個人を取り巻く環境との相互作用から分析を行う応用行動分析（山本・澁谷, 2009）の理論に基づいたスタッフトレーニング（田中, 2017）があり、その効果が検討されている。しかしながら、大学生が実際に子どもと関わる経験を積むことで、大学生が応用行動分析の知識を習得したかどうかを検討した研究は、神経発達症児へのプログラムにおいてスタッフトレーニングの効果検証を行なった渡邊（2018）のみである。渡邊(2018)は、神経発達症児 1 名に対する個別のプログラムに大学生が参加している。しかし、保育園や幼稚園では、保育士は集団の中で子どもたちと関わるることとなる。そのため、大学生が実際に集団での活動場面で複数の子どもたちと関わる経験を積む中で、応用行動分析の知識がどのように変化するか検証する必要があるだろう。

以上踏まえ、本研究では、大学生が集団での活動場面で子どもと関わる活動（以下、活動プログラム）とそのリハーサルから構成されるスタッフトレーニングに参加することで、大学生の応用行動分析の知識がどのように変化するかを検証することを目的とした。

（方法）

参加者

参加者は X 大学の保育者養成系学部の 3 年生 7 名と 4 年生 1 名（参加者 A・B・C・D・E・F・G・H）であった（4 年生は参加者 C）。参加者 A と B は計画書作成と活動の司会を担当した。残りの 6 名の参加者は、活動プログラムへの反復参加を行なった。活動プログラムには参加者の他に、1 歳 8 ヶ月～2 歳 3 ヶ月の子ども 7 名、保護者 6 名が参加した。

倫理的配慮

X 大学の倫理審査委員会において研究倫理委員会の審査を受け、事前に研究計画とその実行に関する承認を得た。本研究の参加者と、活動プログラムに参加した子どもの保護者から、研究活動や論文作成などへの協力の承諾を書面にて得た。

研究期間

本研究は、Y 年 8 月から 10 月の間に実施された。本研究は、子どもとその保護者との活動プログラム開始前のリハーサルを 3 回、活動プログラムを 5 回の計 8 回実施した。

場面設定と実施方法

活動プログラムは、40 分の事前の打ち合わせと 40 分の子どもと保護者との活動、50 分の振り返りから構成された。子どもと保護者との活動は、リトミック、絵本の読み聞かせ、自由遊びを行なった。振り返りでは応用行動分析を専門とする教員と音楽を専門とする教員がスーパーバイズを行った。

手続き

本研究開始前、リハーサル後、活動支援プログラム終了後の 3 回に渡り参加者全員に KBPAC を実施した。参加者 A・B は、リハーサルの 3 回と活動プログラムの 5 回で自身が担

当する活動の計画書を作成した。それ以外の参加者は、計画書は作成せずに、リハーサルと活動プログラムに参加した。

独立変数

独立変数は、参加者 A・B においては、①活動プログラムへの反復参加と、②活動の計画書作成・司会の担当であった。参加者 C・D・E・F・G・H においては、①活動プログラムへの反復参加のみであった。

従属変数は、すべての参加者において、応用行動分析に関する知識を測定する KBPAC の簡易版（志賀, 1983）とした。

KBPAC と分析方法

KBPAC の簡易版（志賀, 1983）は、全 25 項目から構成され、行動形成・行動除去・行動理論・行動分析・行動維持・強化子・罰・環境統制の 8 つに分類されており、満点は 25 点であった。KBPAC の評定を行なった活動開始前、リハーサル終了後、活動終了後の評定値を作表し、比較した（Table 1）。

（結果）

参加者	活動 開始前	リハーサル 終了後	活動 終了後	変動値1	変動値2
A※	9	7	6	-2	-3
B※	7	7	5	±0	-2
C	7	7	8	±0	+1
D	7	7	9	±0	+2
E	6	7	8	1	+2
F	7	7	9	±0	+2
G	8	10	11	2	+3
H	5	6	8	1	+3

Table 1 KBPAC の評定値の推移

変動値 1 は、リハーサル終了後の評定値-活動開始前の数値を示している（Table 1）。変動値 1 は、変動値 2 は、活動終了後-活動開始前の数値を示している。リハーサルと活動プログラムへの反復参加を実施した結果、変動値 1 は、参加者 E・G・H が 1～2 上昇し、参加者 A のみ 2 下降した。変動値 2 は参加者 C～H が 1～3 上昇し、参加者 A が 3、参加者 B が 2 下降した。参加者の KBPAC の評定値の平均は活動開始前で 7、リハーサル終了後で 7.25、活動終了後で 8 であった。

（考察）

大学生が集団での活動場面で子どもと関わる活動とそのリハーサルから構成されるスタッフトレーニングに参加することで、大学生の応用行動分析の知識がどのように変化するかを検証した。活動プログラムに反復参加した参加者の KBPAC の評定値は上昇傾向であったことから、集団場面における子どもとの活動プログラムへの反復参加は、応用行動分析に関する知識を僅かではあるが向上させると推察された。その反面、活動の計画書作成・司会担当の参加者の評定値は下降した。活動プログラムの計画の構築や司会へ注力するため、子どもの反応に着目しづらくなったと考えられた。

（付記）

本研究は立正大学研究推進・地域連携センター支援費の助成を受けた。

(WATANABE Takatsugu)